

実りの秋を楽しむ保育

あさひ保育園 園長 坂本 顕真

子ども達は生まれたときから一個の人間として尊重されるべき存在です。そのうえで私たち幼児を育てることにたずさわるものは、

- ・生きとし生けるものの命の重さ、かけがえのなさを感じ取れる心
- ・困った人がいたら心を寄せて、助けてあげたくなる、人に優しい気持ち
- ・自分の気持ちや考え方を伝えたりする表現する力、相手のそれを聞き取り対話する力
- ・危険を感じ取り、予期せぬことにも対応できる、しなやかなからだ
- ・あきらめないで困難に立ち向かう力、目標を持って乗り越えようとする力
- ・生涯にわたって続く学びへの構え（学び続ける意欲）

といった、人間らしい情操や「生きる力」の土台を育んであげる責任があります。

しかしそれは、子ども達にそのことの大事さや必要性を、ことばや文字で知識として教えさすことではありません。五感や脳が活発に刺激される、楽しさや好奇心に満ちあふれた日々の生活やあそび・活動の体験を通して、子どもたちが自ら感じ取っていく、学び取っていくことによって初めて身につっていくものです。



私はこうした幼児教育の目的と幼児期の育ちの特性を考えたとき、自然体験をかなめにした「自然の教育」こそが、もっとも大切にされるべきことだと思い、その活動を土台にすえています。

人は自然の中に身をおくとなぜか安らいだ気持ちになります。人間は自然の一部であるという証拠でしょうか。まるごとが生きており、命の存在を教えてください。空気や光の変化、匂い、植物や生きもののもたらすたくさんの刺激が、子どもたちの五感に働



きかけます。感じ、気づき、好奇心をかき立てられた子どもたちは、考え合う・学び合う面白さを知ってきます。

11月は秋本番を迎え、子ども達は、秋の七草の花に出会いながら、散歩に出かけるたびに、柿、くり、みかん、キウ



イ、まつぼっくり、どんぐりを持ち帰って 味わったり、可塑性に富んだ素材が宝物になったりと秋を全身で満喫しているようでした。

農園では、白菜、水菜が収穫でき、大根、ほうれん草、カブが収穫ののを待っています。自分たちで収穫した野菜を調理して（調理してもらって） 食べるという営みは、子どもの心と体を調和させ、食卓が一段とにぎやかになり、どの子ども笑顔ではじけます。とくに、お兄さんお姉さんたちが収穫した野菜やみかんをいただくときは心のつながりを感じるのでしょうか。小さい子ども達はとても楽しそうに嬉しそうにほおぼってくれます。視覚的に感じる秋、肌で感じる秋、さまざまな感覚で季節を楽しんだ子どもたちでした。

学齢期の子どもを対象にした国際的な比較調査では、日本の子どもたちの特徴として「自己肯定感が低い」こと「知識はあるが思考力や表現力が乏しい」ことがあげられていて(OECD調査など)、私自身現場そのことを年々実感するところでもあり、日本の教育のあり方が問われているのだと思います。



また、東日本大震災と原発事故による悲劇は、これまでの価値観をくつがえすほどの大きなショックを与えました。肉親や親しい人、教え子を亡くされた方々の喪失感や苦悩は、はかりしれません。二万人余りの犠牲者のお一人おひとりの命の重みとかけがえのなさを見聞きするにつけ、ただただ、頭をたれて祈るばかりです。住む所も人のつながりも、仕事も故郷も自然さえも、それまであった生きる糧もすべて断ち切られ、避難



生活を続ける厩大な人々、消えることのない被ばくの危険から身を潜めるように暮らす人々。

いま、子どもたちのみならず大人も、命の重みを受け止め、人間らしく生きる力が問われている時代なのだと思います。